

「Minami こども教室」の対話型学習の試み

甲田菜津美 (大阪大学大学院生)

原めぐみ (大阪大学)

2016年9月現在、大阪市内に住む外国籍住民は約12万人、国籍では138か国にも及びマルチエスニック化が進んでいる。文化的言語的に多様な背景を持つ子ども(以下CLD児)も多く暮らしており、大阪市内最大の繁華街周辺にある小学校では、全校児童数の4割以上が外国にルーツをもつ。

本報告は、大阪市中央区でCLD児を対象に2012年から活動する「Minami こども教室」での取り組みを紹介する。特に、2015年12月より開始した対話型学習「Minami Fun Time」(以下MFT)を中心に報告する。

地域の公共施設を借り、週に一度夜間に開催される本教室は、子どもたちにとって学習の場であると同時に「居場所」として定着しつつある。現在登録している小中学生は約50名、支援する大人は約60名いるため、子どもと大人が一对一で学習に取り組める体制が可能である。この強みを生かした対話型学習を実践している。

本教室に通うCLD児は、来日年数も家庭言語も多様なため日本語能力の差が著しいが、MFTはどのレベルの子どもにも対応し得る。個々の自尊感情を高めることで、知的活動に前向きに取り組む態度と学習言語能力の向上を目的としている。手法として、まず各CLD児が個人ファイルを持ち、各人のレベルに合わせ本を選ぶ。大人と一对一で、話の内容の想像⇒音読⇒再話から感想や主題の思考⇒イラストや作文で表現する。これらの流れを対話を通して行う。

現在までの効果は以下の通りである。①作文などの成果物の変化から成長がみられたこと。②支援者側の足場かけにより意欲的にMFTに取り組む姿がみられるようになったこと。③高学年で日本滞在が長いCLD児に関しては「本を読む」行為に対する嫌悪感がみられたため、新聞などの活字資料を用いたことで活動に対する姿勢が積極的になったこと。今後の課題は、CLD児の自信の向上につなげるため、定期的な成果物の発表の場を設けること、また支援者側の認識の共有を常に図ることである。